

---

# 音の無い夜

ともき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

音の無い夜

### 【著者名】

ともや

N1439Q

### 【あらすじ】

とあるジンの少年と、とあるジンの少女の、とある夜の話。

夜に歌つてはいけない。

イヴァはそう教わっていた。人間とは夜に休息を必要とする生き物だから、それを邪魔してはいけない。

何故、毎晩眠る必要が有るのかイヴァには不思議だったが、結局それを一人に尋ねる事は出来なかつた。訪ねる前に、その元を逃げ出してきたから。

見事な満月を見上げながら、一人物思いにふける。過去を思い出すなど、平素しない行動であつた。きっと先日、古い知人に再会した所為だらう。

彼女は昔と何も変わらず、イヴァには理解できない存在だつた。しかし感情的で、情熱的、羨望さえ覚えるその様は決して不愉快ではない。そもそもイヴァが理解出来る存在など、そういう居ないと言うのが事実だ。

「満月か」

声に振り返ると、そこには小さな人影があつた。煌々と焚かれた篝火に、その姿が黒く映し出されている。先日再会した知人、ビルカである。小さな影は不安げに揺れ、静かにイヴァへと歩み寄つた。

「休息を取らずとも宜しいので?」

確かに、彼女には毎夜の休息が必要だつたはず。しかし少女は小さく首をふつたのみで、天幕に戻る様子は無い。

「お主は……ほんに大きゅうなりおつた」

眩くとビルカはイヴアの隣に座り込んだ。其の小さな姿は別れる以前と少しも変わっていない。しかしイヴアには、もうビルカのつむじを見下ろす事が出来る。

「ビルカも形を大きくお執りになれば宜しい。ワタクシなどより余程上手くお使いになられるでしょう」

ビルカは不満げな表情を浮かべただけで何も答へなかつた。ビルカは形を大きくする事が出来ない。

水が重宝される世界で、彼女のあるべき姿は地のジンであるイヴアよりも制限されていた。イヴアもそれを無意識に感じ取っているのか、それ以上は何も言わなかつた。

静寂の中になちりちりと火の爆ぜる音が聞こえる。

ぼうとその明かりを見つめ、二つの影は暫く動く事は無かつたが、ふと、ビルカがイヴアの膝へと頭を移した。

「堅いな……枕にもなりやあせん」

「そうで御座いましょう。天幕にお戻りになるのが宜しいかと存じますよ」

太ももに感じる柔らかな感触に、不思議な感覚を覚えながら、イヴアは羽織っていた布をビルカにかけた。自分は寒さなど感じないがビルカは違うかもしない。全てを自分の物差しで判断しては成らないという事に最近気が付いたが故に起つた行動だったが、ビルカは随分と驚いた様子だつた。

「ほんに……大きゅうなつた。……のう、歌つておくれ、何でも良いから」

「夜に歌つてはならないのですよ。皆さんを起しにしまじょ  
う」

ビルカはくすりと笑うと、上を向きなおした。

「少しくらいなら平氣じやろ? 一曲で良いのだ、聞かせておくれ」

そうしたら天幕に戻るから、と。そう言えども、四人で旅をしていた頃も、ビルカは度々こうして一人に歌を強請ついていた事を思い出す。そして其のたびに、あの一人は見事な旋律を夜へと響かせるのだ。

「そうで御座いますね……この素敵な夜に、一曲捧げるのも宜しいでしよう」

「妾に捧げよ。全く、無粋な所は成長せんな」

「……無粋」

一体何が無粋だったのか、イヴァには全く理解できなかつたが、聞き返すことはしなかつた。下手に機嫌を損ねて水をかけられては堪らない。

夜空を見上げ、何を歌おうかと考えを巡らせる。

ああそうだ、この歌が良い。満月の光を受け、思い出されたのは子守唄だつた。

イヴァは喉を震わせ、静かに歌い始める。砂を震わせれば全身で歌うことも可能だつたが、歌声とは口から響くものだ。

歌い始めてしまえば、もう俯く事は無く、只管に満月を見上げた。静寂に憚つて小さかつた歌声が徐々に大きくなる。それは歌を強請るビルカへと、一人が良く聞かせていた歌だつた。

イヴァはその情景をよく覚えている。イヴァの中でそれはとても心

地よいモノとして記憶されていた。自らもその一部分になりたいとずつと願っていた。しかし一人が死んでしまった今、その夢は一生叶わないのだろう。

この日初めてイヴアは一人の下から逃げ出した事を後悔した。

子守唄も終わりを告げる頃、ごそり動く気配と共に、イヴアは太もに鈍い痛みを覚えた。じんわりと広がる痛みと、伝わってくる相手の細かな震え。動いてはならないのだろうと感じられた。懶々下を向かずとも、何が起っているのか理解できた。

俯くべきではないのだろう。満月を見上げたまま、静かな歌を歌い始める。

今度は、二人がイヴアをなだめる時に良く聴かせてくれた歌。

何故、だか解らないが、イヴアの手はビルカの頭をやさしく撫でていた。

徐々に広がる痛みに思わず眉を顰めたが、何も言つべきではないのだろうと感じていた。

言葉にならないこの思いは、きっと歌声と共に響いているはずなのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1439q/>

---

音の無い夜

2011年1月16日06時34分発行